

退院前訪問指導の実態調査について
～住宅改修を実施した患者のアンケート結果から～

新潟リハビリテーション病院

リハビリテーション部作業療法科 桑名智子 松尾恵美

内山香 中野麻美

同 リハビリテーション科 医師 崎村陽子

介護老人保健施設 尾山愛広苑 佐藤大樹

介護老人保健施設 中条愛広苑 櫻井美津子

【背景】

当院では退院前訪問指導（以下訪問指導）を必要に応じて実施している。その目的は、患者の活動レベルに応じた住宅改修と福祉用具の選定を行うことにより退院後の生活の質の向上を図ることである。今回、改修の現状把握と改修が適切であったかを確認するためアンケート調査を実施したので報告する。

【方法】

対象は、平成19年4月から平成22年3月までに当院回復期病棟から自宅へ退院した患者361名とした。方法は、対象者へ郵送でのアンケート送付・回収とした。内容は作業療法士、理学療法士（以下セラピスト）の関わりを問い、①セラピストからアドバイスを受けなかった、②セラピストからアドバイスのみを受けた、③セラピストが訪問指導へ行きアドバイスを受けた、④その他、とした。改修箇所を①玄関前、②玄関、③廊下、④トイレ、⑤浴室、⑥洗面所、⑦寝室、⑧居間、⑨階段、から選択し、適切に使用できているか、また不適切の場合は理由を記載してもらうものとした。アンケートを回収できたのは193名、そのうち住宅改修を実施したのは129名、有効回答の107名（平均年齢69±11歳）であった。

【結果】

セラピストの関わりは、①セラピストからアドバイスを受けなかった18名、②セラピストからアドバイスのみを受けた37名、③セラピストが訪問指導へ行きアドバイスを受けた45名、④その他12名。改修箇所は、①玄関前79名、②玄関79名、③廊下48名、④トイレ99名、⑤浴室58名、⑥洗面所23名、⑦寝室37名、⑧居間16名、⑨階段21名であった（図1）。不適切との回答は107名中5名であった。

【考察】

今回のアンケートから、9割以上が適切に改修箇所を使用できていることが分かった。その要因として、①退院前に図面や写真で家屋状況を確認したうえで、退院後の生活を想定したデモンストレーションや動作指導を行っていること②デモンストレーションで不十分な場合は、訪問指導へ行き家族指導も含めたアドバイスを行っていること③退院前に家族や本人、ケアマネージャーを含めた話し合いを行っていることが考えられる。しかし、107名中5名は不適切との回答であった。そのため、今後は退院後の生活に不具合が生じていないかを把握するための調査手段を検討していく必要があると考える。そして不具合が生じている患者、家族に対し、他の機関との連携をとり、退院後の生活の支援が継続して行えるよう、すすめていく必要があると考える。

【結論】

今回、退院前訪問指導の実態について、住宅改修を実施した患者へアンケート調査を実施した。107名中102名が適切な改修が行われていたと回答された。改修箇所は、玄関前、玄関、トイレの改修が多く実施されていた。セラピストが退院前訪問指導を実施することは有効であったと考えられた。さらに、患者のADL向上・改修・用具に関する知識・技術を向上させる必要がある。また、退院後の患者生活が把握できるためのシステムを構築する必要性を感じた。

図1

